

平成二十八年年度 桜蔭中学校入学試験問題 (国語)

受験番号)

答えはすべて解答用紙に書きなさい。

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

門をくぐる時、私達の心は躍る。あるいは実際にくぐらないで眺めるだけの時も、私達はその時の心の高まりを思つて、喜ぶ。門のかたちは、そのような力を持つてゐるものだ。

しかし時には、門は私達を緊張させ、逡巡させ、立ち止らせるかもしれない。門の前で私達は、自分は果たして招かれてゐるのか、本当に入るべきなのか、引き返すべきではないのか、迷う時もある。門は招き入れるものであり、同時に拒み閉じられるものでもある。門とはそのようなものだ。

「狭き門より入れ」という言葉は、天国に入るための準備の大切さを教えた聖書の一節であるが、日本では、入学試験の難しさ、それを突破する価値を語るために、広く用いられてゐるようである。いずれにせよ、門の意味は、入れてもらえる人もあれば、入れてもらえない人もあるということが示されてゐる。誰でも、勝手に入れる門を入つたつて面白くもありがたくもない。入れてもらえない人もある門に、自分は入れてもらえたからこそ嬉しいのだ。そのことは、決して、大学の場合だけではない。家の門の場合でも同じだ。家の門という大げさな造りがないなら、広く出入口、戸口、と言つてもいい。Aここは、私の入口だということに価値がある。だからこそ、そこに入れてもらえる人は、家族、友人であり、特に招かれた客人、ということになる。入れたくない人、入ってもらいたくない人がいるからこそ、家には、かんぬきが、あるいは錠がかけられてゐるのがあたり前なのだ。門という漢字の古い字体は、まさに、この開いたり閉じたりするかたちを図形化したものである。

「A」とは、同じ門をくぐつて入り、生き方、考え方を共にする人々のまとまりをいう。「入門」とは、その仲間に入れてもらうことだ。そのためには、決心、決意が大切だ。門はそれを自分に確かめ、そして示す場所である。禅の修行を志して越前永平寺の門をたたく者は、拒まれても拒まれても、立ち去らず三日間ひたすら立ち続けた後初めて入門を許された。

このように門とは、入る前に、立ち続け、自分の心を確かめる場所でもある。それは準備が必要であり、待つことも、期待も、また不安もそして決意も必要である。門は、Bそうした人間の行為、心の動きに応じたかたちを持つことが求められてゐる。学び舎の門とは、たとえば江戸時代につくられた岡山に残る閑谷学校をみても、桐生に再建された足利学校をみても、あるいはオックスフォードやケンブリッジのカレッジの門をみても、それぞれこのような門の持つべき多様な意味に対応した見事なかたちが与えられてゐることに気づく。

このことは、都市が門を持つてゐる場合においても同じである。共同体としての性質を持つてゐた都市には、必ずなんらかのかたちで入口があった。入口によつて共同体の存在は守られてゐたのである。城壁で囲まれていた古代や中世の都市においては、門は一層はつきりとしたかたちをとつた。門の内には法律と秩序があり、外には無法、無秩序があった。門の内には法に従う市民が住み、外には無法者が住んだ。従つて、門は多くの場合、Cサバキの場所でもあった。エリアードは、「古代においては、判決の場合、閥の上に置かれた」と述べてゐるが、まさに門とは秩序の支配する空間と、無秩序の支配する空間との境であつたからである。

* * *

C人の住む空間の大切な基本条件は、人が訪れることにある。私は、ひとり住み、また他を招いて住むのである。動物の巣と人間の家の重要

な違いのひとつが、ここにあることは、すでに第二章で述べた。門・入口によつて、内(私)は外(他)とつながるのである。内に私が居る場合、誰を私は招くのか、誰を私は拒むのか、私が外に居る場合、私はここに入ることを望むのか、否か、この大切に難しい判断をするのが門である。

門は、鉄道の改札口のように、ただ人が瞬時に通過するためのものではない。「オン」か「オフ」かを仕分けるだけの選別機ではない。門は待つところでもあり、判断し決意するところでもある。従つて、部屋の囲いに開かれた最初の開口部である入口は、ひとつの開口に始まつて、やがてそれ自体がひとつの空間となり、部屋にならうとする。

縄文時代の竪穴住居をみても、入口の上にひさしがかけられ、そのひさしを支える柱が立ち、しばらくするとそこにひとつの小さい「イ」が生まれてくる。これはどのような原始的な住居においてもみられることである。

(中略)

門は単なるオン・オフの機構ではないことをもう一度それぞれの経験の中でとらえ直していただきたい。建築を見る喜び、訪れる楽しみが、門に集中してゐることに改めて気がつくことであらう。

モダニズムの建築は、門は過去の②イブツであり、古くさい權威に結びついた虚栄である、とみなしたこともあった。第二次世界大戦後の日本における住居改良運動や住居学等においては、玄関、門構え等は封建的な社会の生み出した虚飾として否定的に扱われた。しかし、このような考えは、単に門の③ケイジということ以上に、内なる空間、内なる生活のとらえ方そのものが、浅薄だったといわざるを得ない。今日改めて、個々内部空間が自己の固有性を獲得しつつ、全体としてつながつていくことの求められている時、門の新たななるはたらきとそれを生み出すかたちがつくり出されなければならない。

(香山壽夫『建築を愛する人の十二章』)

注 1 逡巡：決心がつかなくてぐずぐずとためらうこと。

2 かんぬき：門や出入口の開き戸をしつかりしめるための横木。

3 カレッジ：ここでは、学生のための寮。

4 閥：内と外の境。

5 第二章で述べた：第二章はこの問題文に入つていません。

6 モダニズム：つねに新しさを求める傾向。

7 虚栄：うわべだけを飾つて、実際よりもよく見せようとすること。

8 封建的：上下関係を重んじ、個人の自由や権利を認めないさま。

問一 — Aとありますが、「私の入口だ」とはどういうことですか。そして、なぜそのことに「価値がある」のですか。まとめて答えなさい。

問二 — Aにあてはまる言葉を、漢数字をふくむ漢字二字で答えなさい。

問三 — Bとはどういうことですか。「そうした人間の行為、心の動き」というのがどういふことを指すかくわしく述べた上で、二百字で説明しなさい。

問四 — Cとありますが、なぜそう言えるのですか。説明しなさい。

問五 — 「イ」にあてはまる言葉を、問題文中から探して漢字で答えなさい。

問六 — ①③のカタカナを漢字に直しなさい。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「ほのおの革命家」のことについては、^{注1}ヤービも大人たちのお茶の席で「一度ささやかれるのを聞いたていどなのですが、『ほのお』と『革命』という二つの文字がくっついたところが、なんとも刺激的で、ヤービの想像をかきたてました。大人たちがそれをいうとき、そつと声をひそめたところもまた、よかったです。あまりきいてはならないことなんだな、とわかりましたので、直接きいて怒られ、用心されてヤービの耳に入らないようになるより、そしらぬ顔をして大人を油断させ、それとなく①ジヨウホウを集めるほうがいいと思われました。今までヤービが収集した「ほのおの革命家」についてのことは、「いよいよ『ほのおの革命家』がいつていたことはほんとうになるのかな」ということばと、「さすがは『ほのおの革命家』だな」ということばです。どうです。ミステリアスでしょう。

ヤービはまだ、「ほのおの革命家」に会ったことはありません。けれど、ヤービの想像のなかでは、ほのおの革命家は、働かされ、しいたげられたどれいたちのために、あくどい監守と、親玉の領主と闘い、ひどい傷を負いながらも、どれいたちが閉じこめられている柵を開き、「さあ、行きたまえ。きみたちは、自由だ！」と高らかにさけぶのです。この最後のセリフを考えると、ヤービはいつも胸がいっぱいになります。「ほのおの革命家」は、それからもしいたげられたどれいたちを解放しつづけ、しまいにはどれいのいない世の中をつくります。それがヤービの今いる世界というわけです（そう考えれば、つじつまが合います）。

^{注2}けれど、パパ・ヤービが子どものころ、どれいだったという話は聞いたことはありません。「ほのおの革命家」はいくつぐらいなのでしょう。グラン・グランパ・ヤービがどれいだったという話も、聞いたことはありませんが、もしかしたら、グラン・グランパ・ヤービは「ほのおの革命家」の助手―あるいは、どうし―だったかもしれないかもしれません。そうすると、「ほのおの革命家」の歳は……。ヤービは、「ほのおの革命家」は少年のころにその革命をなしとげたことにしました。

（中略）

ヤービ族の「名まえ」というのは、^{注3}わたしたちが考える「名まえ」というのとは、少しちがうようなのです。ヤービたちの「名まえ」は、どちらかというとむかしながらの記号のようなもので、「ヤービ」は、いちばん最初の子どもの名まえとしてつけられます。いちばん上がヤービ、二番目がマミジロ、三番目がセジロです。子どもが生まれたら、それまで「ヤービ」だったヤービは、パパ・ヤービ、パパ・ヤービだったヤービは、グランパ・ヤービになります。これには、きびしいおきて、のよなものではなく、その子とわかれがいいようなのです。^{注4}セジロは、むかしセジロと呼ばれた女の子のいちばん目の子どもですから、ほんとうはセジロ・ヤービ・ヤービと呼ばれることになるのですが、今、生きているマッドガイド・ウオーター・ヤービのなかで、彼女のほか、セジロと名のつくものはひとりだけで、そのセジロはママ・セジロになったのですから、みな、その子どものことをセジロと呼ぶことにしたのでした。ヤービ族は、夫婦になると、夫側の一族か、妻側の一族かに入っていきます。実はママ・ヤービも、むかしはセジロと呼ばれていたのですが、結婚したので、ヤービ夫人セジロになりました。ふだんはそれでよかったのです。ほら、お友だちで同じ名まえの人がいても、あまりこまらないうでしょう。「ヤービ夫人」は、どつちのセジロかわからなくなったとき、念のために使われる呼び方です。あとは、巻き毛のセジロ、とか（ママの毛は、ほんの少し、先がくるつとカーブしていたのでした）。でも、ヤービが生まれたら、それからずっと、ママ・ヤービです。それは、子どもを持つているおかあさんヤービ、という意味ですね。

^{注5}お役所のようなものはありませんから、それでいいわけなのですが、「クワイ族史」を執筆中のパパは、書きながら、これは読むものもきつと、いったいいつの世代のヤービなのか、はたまたセジロなのか、マミジロなのか、さっぱりわからないのではないだろうか、としよつちゅう頭をかかえていました。

A「こまったものだ」

お茶のとき、そうばやきますと、ちようど遊びにきていたマミジロが、「われわれも、そのじんぶつだけの、とくべつな『名まえ』というものを、考えるときにきたのではないかな」と、そわそわしながらいいました。マミジロは自分にとって「じゅうようじこう」と思われることになる、いつもそわそわしてしまうのだそうです。「名まえ」のことは、マミジロには「じゅうよう」なことがらだったのでですね。

「とくべつな、なまえ？」

そばで帳面にヒシの実際の写生をしていたヤービは、ふと顔を上げました（このときヤービが写生していた実のなるヒシは、水生植物です。ハスのように、沼や湖に浮かんで葉を茂らせます。ヒシ、という名まえは、その実がひし形ということからついています。ヒスクイやオオヒスクイという名の水鳥がいますが、彼らの名まえは、このヒシの実をよく食べることからついています）。

外はしずかに雨が降っていました。こういうときは、家のなかで話されることばがよく聞こえるものです。

パパとマミジロ、ふたりの会話を聞き流しながら、ふと耳に入った「とくべつな名まえ」ということばにぴんときたのは、以前、トリカやセジロと、ポリッジの味わいについて、正しい言い方を考えようとしたときのことを思い出したからでした。

「アそう、そのもののためだけにつくられた、とくべつの名まえ」

マミジロはうつとりしながらいいました。

「ぼくはずっと、マミジロと呼ばれることに、へんな感じがしていたんだ」

それを聞いて、パパはびっくりしました。

「それは知らなかったよ」

「兄弟でも知らないことはあるものさ」

マミジロはうなずきました。

「きみは、じぶんを、なんて呼ばれたかったんだい」

「イさすらいの詩人」

マミジロはそくぎにこたえました。

「うーむ、とパパはうなりました。そして、

「それは呼びにくいだろう」

と、つぶやきました。マミジロは、

「そうか、やっぱりそう思うかい、兄さん」

と、考えこみました。自分でも、そのことが気がかりだったのでしよう。

「思うんだがね」

パパは考えこんだマミジロにしずかに話しかけました。

「『名まえ』というものは、もう、ついでにしまったが最後、その人物に切りはなせないものになってしまふんじゃないかね」

それを聞いて、マミジロは、

「そんなことはないさ。そりゃ、ぼくが明日からだねえ、たとえば……」
といつて、いいにくそうに、

「『ヴブリリアント』とか呼んでほしい、というとするだろう。そうすると、最初のうちは、みんなへんな感じがするだろうけれど、しばらくしたら、ぼくのことを」

それからまた、いいにくそうに、

「ブリリアント、としか思えなくなるんじゃないかな」

と、少し不安そうな声で言いました。パパはちよつと、あつけにとられたようにも見えましたが、

「変えてもいいさ。でもやっぱり最初の名まえを知っているものには、どこかにその最初の名まえのしっぽみたいなのがくっついてはなれないだろうね」

「そうかなあ」

マミジロはそれから考えこみ、考えこんだまま、その日は終わってしまいました。

けつきよくマミジロは、まだこの件について、なっとくのいく答えが見つかってないのだということです。

ヤービの方は、だまってこの話を聞きながら、自分はただのヤービでもないな、と思っていたのだそうです。

「**C**名まえって、ちょっとしたコートのようなものなんじゃないでしょうか」

なるほど、とわたしは思いました。

「では、ヤービというのは代々受けつがれたコートかしらね。そう、かくれみののようなものかもしれませんね。自分をやりわりおってくれる」

そうそう、とヤービは賛成してくれ、

「**D**たった一つの自分だけとくべつの名まえがあって、それをしよつちゅう呼ばれるなんて、なんだか、ひりひりする感じなんじゃないでしょうか」

ヤービはボートの上で、わたしにそういいました。ヤービは、ヤービと呼ばれることに**②マンゾク**しているようすでした。

名まえのことは、考え出せばきりがいいことですが、本人がそれでいいと思えることがいちばんたいせつなんでしょう。マミジロもいつか、自分にいちばんびったりする名まえが見つけれればいいのですが。そうですね、ヤービのいうように、びったりしすぎてききうくつでひりひりするかもしれないので、もう少しいいかげんなものでもいいですね。そう思えば、なんとか夫人、かんとかのママ、なんていう、なんとか氏やかんとかちゃんに関係づけた呼び方も、その奥で、「ちゃんとした」**E**だれかがウインクしている、おおらかな「名まえ」のような気がしませんか。

(梨木香歩『岸边のヤービ』)

注 1 ヤービ…ふわふわの毛につつまれた、二本足で歩くハリネズミのようなふしぎな生きもの、ヤービ族の男の子。

2 パパ・ヤービ…ヤービのパパ。ヤービは、マッドガイド・ウォータ―と呼ばれる湖のそばの杉の穴で、パパやママと暮らしている。

3 わたし…ある日、ヤービが岸辺で出会った人間。ときどきヤービに会っては、ヤービ族の話を聞いている。

4 セジロ…ヤービと仲良しのいとこ。パパ・ヤービの妹であるママ・セジロの娘。

5 クーイ族…ヤービ族が属する種族の名まえ。

6 マミジロ…パパ・ヤービの弟で、詩人。

7 トリカ…ヤービの友だち。ベック族の女の子。

8 ポリッジ…たべもの名まえ。

9 ブリリアント…きらきらと光り輝くことなさま。

問一 — **A**とありますが、パパがこまっていることについて説明しなさい。

問二 — **ア**の部分や、**イ**や**ウ**の名まえのとくちようをふまえて、マミジロが名まえについてどのように考えているか説明しなさい。

問三 — **B**でいっていることを、「ほのおの革命家」の例にあてはめると、どういうことになりますか。説明しなさい。

問四 — **C**や**D**から、ヤービが名まえについてどのように考えているか、それぞれ説明しなさい。

問五 — **①・②**のカタカナを漢字に直したとき、それぞれの最初にくる一字をふくむ二字熟語を考えて答えなさい。二字熟語の上・下どちらに使ってもよい。

問六 — **E**はどのようなことをたとえていますか。次から選び記号で答えなさい。

ア あなたをだましますよ、と言っているようす。

イ あなたを夢中にさせますよ、とさそっているようす。

ウ いるのかわからないようす。

エ わたしはここにいますよ、と言っているようす。

